

# 地域活性化という領域

和田 義貴

日本経済研究所調査局 主査

地域経済の再生・活性化は、ナレッジやソリューションの提供者としてのシンクタンクにとっても継続的な課題である。地域活性化関連の調査業務を行う上で感じた、地域活性化におけるシンクタンクの役割と、シンクタンク自身が地域から学ぶことについて、事例紹介をまじえて言及したい。

## 1. 地域経済の課題

地域経営には、継続的な努力が必要である。自治体であれば、社会動向の変化をとらえ、ビジョンや戦略、課題への対応策を企画・立案し、サービスを提供し、その成果を積み上げていかなければならない。市民サイドであれば、望ましい地域のあり方を提案し、取れるリスクを取って活性化策の一部を実施していかなければならない。

しかしながら、目の前の課題への対応策をタイムリーに打てなかったがために、そこかしこで地域経済の衰退が現実のものとなっている。人口・就業・購買の流出、事業所の廃業・撤退の増加、観光入り込みの低迷、空き地だらけの中心市街地の出現など、地域が抱える課題は、致命的な逸機のリスクが顕在化してしまった結果である。

## 2. 地域と協働するシンクタンクのあり方

一方で、全国を見回してみると、地域を元気にし、輝かせるためにがんばる多くの人々が存在する。そうした人々に接するとき、いつしか調査機関という立場を超えて共鳴している自分に気づくことがある。

では、シンクタンクが地域の人々と共に活性化に取り組むためには、どのような視点が必要とされるのだろうか。

地域に潜在する付加価値を共に発見し、活性化の

ためのアイデアを練っていく過程で、シンクタンクが果たすべき役割のひとつは「よそ者」である。よそ者とは評論や説教をする人のことではなく、地域を輝かせるためにがんばる人々に共感し、協働するプレイヤーのことである。

最初の仕事は、旅人として、あるいは消費者として、地元の人とは異なる視点から地域資源を見つめ、新たな価値が生まれる可能性を見出すことである。活性化の視点で地域を見つめると、山水の美しさや人々のひたむきさ、食資源の豊かさなど、心の琴線を揺らす多くの地域資源が見えてくる。よそ者なりの地域愛の萌芽が、協働の第一歩である。

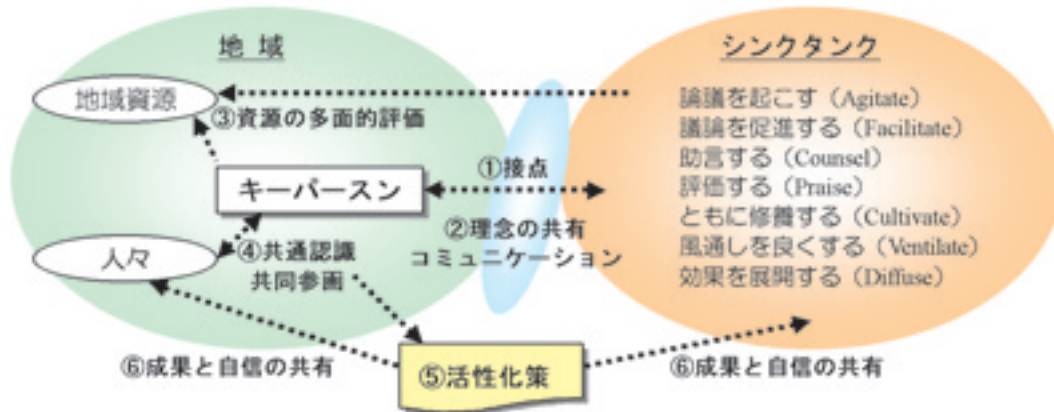
旅人の視点で地域資源の素晴らしさを感じながら、地域でがんばる人々と交流し、問題意識やビジョンを共有する。そこで重要なのが、理念を共有できるキーパーソンと接点を持つことである。例えるならば、「富士山のふもとに住み、東京から見る富士山の美しさも知っているような人」が、よそ者と地域とを結ぶキーパーソンである。こういった人と理念を共有し、地域の中で毎日何気なくそれを見ていた人たちと一緒に「富士山に登ってみる」ことで、価値の共有が図られ、コミュニケーションは深化する。

コミュニケーションを続けながら、シンクタンクとしての専門性を活かし、活性化策の企画・立案や実施を支援する。最初の活性化策は小さくても構わない。成果を残し、達成の喜びと次につながる自信を共有することが、地域にとっても、シンクタンクにとっても重要なのである。

## 3. 具体的事例における関与

地域シンクタンクと当研究所の共同受託調査「周南地域における都市再生モデルの構築」を一例に、

## ＜協働のイメージ＞



市民発の地域再生に向けた取り組みへの関与のあり方を振り返りたい。

同調査は、素材産業のコンビナートで栄えた周南地域を、地域の資源と人材を活かし、市民発意で短期に実施できるアイデアを駆使して再生するための試みである。

かねてより周南再生に思い入れを抱いていた地元の人々を、熱意ある地域シンクタンクが委員会形式でコーディネートし、委員会での発案や市民へのヒアリング、事例調査等を踏まえて、再生策を具現化可能なスキームに落とし込んだ結果「推進者の顔が見えるアクションプラン集」という、珍しいアウトプットとなった。

共同研究先である地域シンクタンクと当研究所のコラボレーションは、手探りのすりあわせから始まった。地域シンクタンクは周南をよく知り、組織や人々との密なネットワークを持っているが、活性化調査

は初の挑戦であった。対して当研究所は、周南に関してずぶの素人であり、唯一の強みは周南の資源を別の視点で評価できる「よそ者」の視点であった。

「2者の協働でどこまでできるか」「より実践的なプログラムに近づけるには、どうしたらよいか」「材料はこれだけで充分か」など、お互いに数々の不安を抱えながらのスタートではあったが、議論の中で得意分野や経験に基づいた仮説を出し合うことで払拭し、問題意識や到達点のイメージを紙に落とすなどの協業を通じ、理念を共有していった。

一方で、周南の良いところすべてを理解するために、街を歩き、買物をするところから始め、あらゆる地域資源の把握を試みた。また、活性化策の具体化を進めるにあたり、それらの示唆となるような先行事例の仕組み、大学に協力いただいたアンケート、市民へのヒアリング、まちなか活性化に取り組む先進事例の調査結果などを睨みながら、周南活性化に資する要素を探した。

協業でまとめられた調査結果は、既に地元展開され、具体化しやすいものから進捗している。学生による起業体験『ベンチャー道場』構想は、地域における教育機関等の主導のもと、賛同者を増やしながら広がりを見せており、周南活性化のための『市民50人委員会』も人選が進んでいる。また、教育機関と企業との協働は『寄付講座』として動き出している。準備期間を要する他の再生策についても、既





周南コンビナート（周南市 WEB サイトより）



ツリーまつり（周南市 WEB サイトより）

に着手された取り組みの成果を見ながら検討されることとなる。

今回の調査結果が地域に展開される上で重要であったと思われるポイントは2点ある。ひとつは再生策がいずれも地域資源を活用したソフト中心のものであったことであり、もうひとつは地域シンクタンクが地域をコーディネートしながら、引き続き再生の旗振り役となっていることである。

#### 4. 地域活性化のポイントとは

「国破れて」ー地域経済が衰退したとしても、「山河あり」ー地域資源はサステナブルである。

地域に暮らす人々が、ふだん何気なく触れている固有の資源を見直し、自らそれを活かす方法を吟味することで、特産品に負けない価値を秘めた尊いアイデアが生み出される。

このとき必要なのは、膝を突き合わせるコミュニケーションの機会であり、既成の枠に束縛されない発想と実現可能な枠組みであり、中心になってがんばる人を支援し続けていく体制である。多くの活性化の取り組みは「余裕がない」「色々やったが効果はない」「しがらみがある」「利害相反する」「自分には関係ない」などといった多くの障壁を乗り越えて広がり、「資金」「制度」「熱意の維持」などの課題を、実際に解決しながら進められている。

事例の与件や特性はそれぞれ異なるものの、活性化の試みは「市民発意の展開」「地域資源の再評価」「できることから始める」「成功体験を共有する」など、共通するポイントを持つ。

2. で示した協働イメージから、地域活性化のポイントとシンクタンクが果たせる役割を、段階を追って下表の通り整理してみた。

〈地域活性化のポイントとシンクタンクの役割〉

| 地域活性化のポイント                 | シンクタンクの役割      |
|----------------------------|----------------|
| コミュニケーションによる問題意識の共有、課題の明確化 | キーパーソンとの接触・交流  |
| 地域資源の再評価                   | 資源の目利き         |
| 新たな視点と価値観づくり               | 視点と価値観の付加      |
| 資源に最大の付加価値を与えるアイデアの吟味      | 付加価値あるアイデアの検討  |
| 実現可能な枠組みづくりと得意分野での役割分担     | 体制、スキーム、リスクの評価 |
| 小さな成果の積み上げ                 | 成功体験の共有、成果への評価 |
| 継続意欲の喚起                    | 次段階の目標設定       |

一方、取り組みを継続していく上で「地域経済への活性化効果の確認方法」「実績・ノウハウ・マインドの継承」などが、主な共通課題として浮かび上がってくる。

## 5. シンクタンクとして地域に学ぶ

地域経済活性化は、シンクタンクにとって古くて新しいテーマである。その活動領域は、活性化計画の策定など「つくる」こと主体の従来型から、活性化アクションの支援のために「行動する」こと主体へとシフトしていかなければならない。

地域でいう「山河」にあたるシンクタンクの基礎的な資源は人材である。そして、地域経済活性化に真剣に取り組む最前線にシンクタンクが関与することは、当該分野における知識・技術の獲得のみならず、プロジェクトを遂行する人々との接触を通じて、自らのモチベーション継続や、仮説の検証、マネジ

メント意識の向上につながるなどの意味で、大きな示唆を得られる可能性を持つ。

今後、我々シンクタンクは、「地域を輝かせたい」人々の思いに共鳴し、協働するために、心の琴線を張り、資源の真の価値を見出す目を持ち、知恵の引き出しを増やし、コミュニケーションの力を磨く必要がある。

また、当研究所のように「公正かつ広範な視点を持った在京シンクタンク」としての特性と、地域を深く知る地域シンクタンクの蓄積とのコラボレーションが、大きな相乗効果を生み出すことも期待される。

地域活性化のための「共鳴盤」としての役割を果たしながら向上していくことによって、当研究所が開き始めた「地域活性化という領域」でのプレゼンスが、より確かなものになると信じ、拙文の結びとしたい。